講　　評

評価委員　　髙　石　昌　弘
（国立公衆衛生院・院長）

合計特殊出生率が低下したため，従来いわれていた「母子保健の量から質への転換」が益々重視されてきた。この意味では，地域・家庭環境が小児の健康に及ぼす影響は，研究課題として一層脚光を浴びてくるであろう。この研究班は，発育発達や養育上の問題という，いわばソフトの面と，事故や先天異常という明瞭な健康障害に関わるハードの面の両面についての分担研究班で構成されており，その成果が大いに期待されている。

このような認識のもとに今回行われた研究報告会に参加し，それぞれの分担研究班の研究成果の概要に接することができた。全般的に感じた第一の印象は，昨年に続く第２年度の研究成果として，極めて奥行きが深くなり充実してきたということである。以下，当日のプログラムに従って簡単に感想を述べたい。

高野分担研究班の研究課題は「小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究」である。食行動や保育条件が発育発達に及ぼす影響は複雑であり，肝心の発育発達の経過に個人差が大きいという点が重要である。発育発達の経過の個人差を生理的範囲として理解しようとする場合，その範囲の判断には人それぞれの価値観も関わってくる。したがって，この問題を明確にするためには，どうしても縦断的研究が必要となる。総合的な研究を進め，ぜひ，養育条件，保育条件，地域性などの諸種の要因と，個人差を考慮した発育発達の経過という結果との関連性が何らかの形で明瞭となることを期待したい。

田中分担研究班の研究課題は「小児の事故とその予防に関する研究」である。小児の健康問題を論ずるとき，事故防止の課題がいかに重要かはいうまでもない。今日，保健所における保健情報のネットワークづくりが大きな話題とされているが，小児の事故についても全国的な視野にたって，その防止施策が論じられなければならない。この意味では，サーベイランスのためのプログラム開発も含め分担研究班として総合的なアプローチをしている点を評価し今後の発展を期待したい。その場合，事故の定義を明確にすること，発達段階による対応の違いを考慮すること，さらに，心理・行動科学的なアプローチを加えることなどによる一層の充実が望まれる。

有馬分担研究班の研究課題は「先天異常のモニタリングおよび対策に関する研究」である。遺伝と環境の相互作用として発現すると考えられる先天異常の発生頻度が環境の変化により影響を受けることは当然である。したがって，潜在している重要な環境変化を発見して対策を樹立するためには，定期的に通常の発生状態を把握しておく必要があり，この意味でモニタリングは重要な意義をもっているはずである。とりわけ，食品添加物を始め近年の生活環境中にみられる新しい化学物質の急増を考えると，系統的な監視システムによる警告が極めて重視される。たゞ最近の胎児診断による人工流産の増加のためベースラインが動くことに留意する必要があろう。いずれにせよ，研究の成果をふまえた経常のモニタリングシステムの構築が望まれる。

岡分担研究班の研究課題は「小児の健康と養育条件に関する研究」である。養育のズレすなわち対人関係の歪みからみたアプローチは，複雑な条件が関連するため価値観の側面に視座をおかねばならぬことが多い。この意味では，むしろ身体的な面よりも精神的な面つまり心の健康の課題として検討されなければならない。したがって，追跡調査はぜひ必要とされるし，さらに近年の若い人びとの一般的なライフスタイルを考慮した検討が重視される。子育ての基本的な課題を解決するためのよりどころに迫る研究として，この班の研究成果も大いに期待されよう。

上記の４分担研究班の研究報告のそれぞれについて簡単に感想を述べた。３年間の研究の中間年度として，十分な展開がみられるので，最終年度のまとめに大いに期待したい。